

## 日本社会における外国人の共生と人権的問題

## 1. 地域の中における外国人と日本人の壁

グローバルゼーションという言葉が誕生してから約 40 年、年々在留外国人の人口が増加傾向にあり教育機関や公共施設において国際に関わる要素を見いだせるほどに日本は大規模な多文化社会へと変化しつつある。しかしこうした中で未だに日本は多文化共生に関わる問題を抱えている。その中で関心を持ったのが文化の背景の違う外国人と日本人の間にできる偏見的又は差別的行動や言動である。ここでは人権にかかわる規模ではない日常生活の範囲において、外国人がどのようなことにおいて自身が壁を置かれているかについて分析し、それに対し個人単位で持っている解決策や地域単位でこのような事例に対応する外国人のための施設の有無と機能について調査する。そしてこれらの結果を踏まえた上で今後の日本の地域社会が問題に対する姿勢や取り組むべき課題について考察する。

## 2. 国と地域、栃木の在留外国人の統計

日本全体における在留資格の認められている外国人は総計 223 万 2189 人(27 年末、前年比約 11 万人増)おり、国籍の多い順で中国・韓国・フィリピン・ブラジル・ベトナム・ネパール・米国・台湾・ペルー・タイとなっている<sup>1</sup>。在留資格別としては永住者約 105 万人の他特別永住者約 35 万人、留学約 25 万人に技能実習約 19 万人、定住者が約 16 万人とその他約 6 万人というような内訳となっている。

栃木県における在留資格の認められている外国人は総計 3 万 3547 人となっており、都道府県全体でのベスト 16 に位置づけられている。国籍の多い順では中国、フィリピン、ブラジル、ペルー、ベトナム、韓国、ネパール、タイ、台湾、スリランカ、と先進国を除いて日本全体とほぼ同順で出る結果となった<sup>2</sup>。(韓国においては大阪と東京に、米国においては静岡に人口が集中している。<sup>3</sup>) 在留資格別としては永住者約 1 万 2900 人の他定住者約 3900 人、技能実習約 3900 人に日本人の配偶者等約 2600 人、留学が約 2500 人とその他約 6500 人となった<sup>4</sup>。国全体と比較して特別永住者の代わりに定住者が多く、技能実

<sup>1</sup> 法務省 HP 「平成 27 年末現在における在留外国人数について」(2016/07/03 最終閲覧)  
〈[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00057.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00057.html)〉

<sup>2</sup> 栃木県 HP 「平成 27 年度末栃木県外国人住民数現況調査結果概要」(2016/07/03 最終閲覧)  
〈<http://www.pref.tochigi.lg.jp/f04/27gaikokujinjuuminsuu.html>〉

<sup>3</sup> 総務省 HP 「都道府県別一国籍・地域別在留外国人(平成 27 年度末)」(2016/07/03 最終閲覧)  
〈<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=00000115023>〉

<sup>4</sup> 栃木県 HP 「外国人住民数等の推移(全体)、割合円グラフ(平成 27 度)」(2016/07/03 最終閲覧)  
〈<http://www.pref.tochigi.lg.jp/f04/27gaikokujinjuuminsuu.html>〉

習として栃木に入る外国人が多いことがわかった。技能実習はここ数年国内における日本語教育のあり方について、数々の論文において考察されているものであり意思疎通における言語の壁と関わりがあることが言える。

また栃木県において市町村別の外国人登録者のデータがあるため記しておきたい。人口1000人を超える地域として多い順から宇都宮市、小山市、足利市、栃木市、真岡市、佐野市、那須塩原市、鹿沼市となっている<sup>5</sup>。

### 3. 外国人から見る日本における小規模な差別や偏見について

宇都宮大学の中国人留学生である女性のA氏、男性のB氏とC氏に「外国人の人権問題」というテーマのもと、外国人が受ける小規模な差別や偏見の有無又はそれに関係する話題についてインタビューを行った。質問内容としてはまず経験した差別・偏見とそれに対する考え方や関連するものについて準備した。

経験した差別・偏見について序盤からA氏に質問を出したが、自身が日本人相手に経験した差別・経験はあまりないという風に答え、またその代わりとして同じ外国人同士での関係性においてもその状態が起きているというような考えを頂いた。ここで聞いた外国人同士の関係性というものに「自国の立ち位置の背景からくる留学生同士の打ち解けづらさ」や、「内モンゴル人と漢民族における都会—田舎の構図に似た関係性」が挙げられた。

続いてB氏とC氏にA氏と同じ形式でインタビューを行った。その結果、A氏と同様に自身が経験した差別・偏見についてはあまり無いと答え、その代わり彼らの知り合いの話で、未だに「外国人と分かった時の日本人の態度・口調の変化」や「日本人にはない外国人のみに対する郵便局員の厳しさ」、「不動産にて外国人の入居お断りとある物件の存在」があると回答した。また日本ではないがとあるヨーロッパの国において中国人がゴミを道に捨てるという確証のない理由で、看板に「ゴミを捨てるな」と中国語表記のみで立てかけるといった興味深い回答も得られた。

この3人に共通する意見に「日本人はこうだから」といった一種の割り切りがあることが新たな考えとして窺えた。このことについて、彼らは留学生という立場上在留期間も長くなり活動範囲がほとんど学校付近に限られるからではないかと考えられる。

### 4. 外国人からの相談の為の公共機関と認知度について

留学生へインタビューを行った後、偏見や差別といった諸問題の解決を助ける手段を考えた際、その一つとして公共の相談所の存在が浮かんできた。宇都宮市HPによれば、外国人の相談を受け付けているのは「宇都宮市国際交流プラザ」と宇都宮市役所2階に配置されている「外国人相談コーナー」の二件のみであった。また栃木県HPを参照した際、日本語での検索の場合市や町毎の相談所の記載はなく、「宇都宮市国際交流プラザ」しか載っ

---

<sup>5</sup>栃木県HP「外国人住民数等の推移（市町別）」（2016/07/03 最終閲覧）

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/f04/27gaikokujinjuuminsuu.html>

ていなかったが、外国語ページにおいて英語、中国語、韓国語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語の6カ国語で別々にPDFファイル形式の相談窓口一覧案内が記されていた。その案内一覧のページであるが、記されているのが電話番号、期日と担当言語のみであったことから、外国人の相談はまず電話を介して情報を伝え、必要な場合として直接現地の相談所へ足を運ぶという構造が伺えた。そのため栃木県全体の外国人の相談は宇都宮市国際交流協会が全て携わっているという結果となった。そのせいか電話と現地いずれの相談時においても多様な国の外国人と会話ができるよという元で複数の外国語による相談というものが用意されており、最低でも週一の間で個別に行われている。

外国人に関する相談一覧(2016年7月の予定より)	
<b>総合相談(市役所2階・市民相談コーナー会場)</b>	
●日時:	
ポルトガル語	毎週木曜日(祝日は除く)の午前9時から正午と午後2時から午後5時
スペイン語	毎週木曜日(祝日は除く)の午前9時から正午と午後2時から午後5時
中国語	第2木曜日(祝日に当たる場合は次週)の午前9時から正午
タイ語	第2木曜日(祝日に当たる場合は次週)の午後2時から午後5時
英語	第2木曜日(祝日に当たる場合は次週)の午後2時から午後5時
●問い合わせ先:外国人相談コーナー 電話番号:028-632-2834	
<b>総合相談(うつのみや表参道スクエア5階会場)</b>	
●日時:	
ポルトガル語	毎週月曜日・第4日曜日
スペイン語	毎週月曜日・第4日曜日
中国語	毎週火曜日・第4日曜日
タイ語	毎週水曜日・第4日曜日
英語	毎週金曜日・第4日曜日
●問い合わせ先:国際交流プラザ 電話番号:028-616-1564	

宇都宮市 HP「外国人に関する相談」

(<http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sodan/025736.html>)

(2016/07/03 最終閲覧)

しかし相談所が少ないという自身の感覚から、はたして現地に住んでいる

外国人の人々はその存在を認識しているのだろうかという部分が気になった。

そのため先ほどの3人の留学生に「外国人の悩みを受け付ける相談所を知っているか」、また知っていた場合に「そのような相談所に行きたいと思うか」について回答してもらった。まずA氏であるが、相談所の存在は知った上でそれらがあることはありがたいが、コミュニケーションの点から相談をためらってしまうと話した。コミュニケーションのことを具体的に聞いた結果、「相談ができて日本語だと気持ちを100%言葉にして出すことができない」と話したことから、相談所において中国語を含めた外国語での相談対応に関して知られていないということが分かった。

B氏とC氏に関しても同じで、生活問題や心理的問題にはとても助かるものの「差別や偏見に関しては言葉の問題も絡んでためらいが生じる」という意見が出た。しかし先ほどのネット上における県の相談窓口の多言語対応の具合から考え、言語という問題もあることながら純粋な個人での相談しづらさや相談することによる不安という要素が外国人の相談をためらわせる要因なのではないかと考えた。そうした意味で友達やSNSといった外国人同士という存在が本人にとってとても重要になってくることが分かった。

## 5. 宇都宮市国際交流協会 国際交流イベントについて

インタビューを行った留学生3人から出た相談相手としての同じ外国人が集まる機会を持てるものということで調査をした結果、外国人の人々が集まり日本人と交流ができるという、宇都宮市国際交流協会の国際交流サロンが毎月第4週日曜日に開かれているという

情報があったため、実際に参加し内容を見学に行った。

プログラム内容としてアイスブレイクとして日本の連想ゲームを英語の通訳付きで行い（今月内容が異なる）、その他は時期によって行われるイベントの作業等を除いては参加者同士の話し合いのみというもので、HP の案内に記載されている「在住外国人と日本人が交流を深めるため」という目的に合うものだった。参加条件は無く誰でも事前連絡なしで参加できるということでさせてもらったが、今月は参加者 20 人後半（いつもより少なめという話が出ていた）で、想像していたよりも社会人の方が多かった印象を受けた。

その交流サロンでの話し合いの時間で、一人の外国人の方と少しだけ日本での暮らしについて話を聞くことができた。保育園での英語教育の先生として今年の 3 月に来日したイギリス人の方で、日本語があまり話せず今必死に勉強中とのことであった。現在の居住先が益子で周りに英語をしゃべれる人がいないことから意思疎通や暮らしの不自由がないかと伺ったが、日本語学習のモチベーションにも繋がるといい、どうしても分からない事柄に関しては持っているスマホで調べればなんとか大丈夫だと話していた。他にも自身のテーマに関連する質問をしたが、特に思い当たるものはなく言葉や文化に関わる悪影響的な問題はないということだった。次に相談所の質問に関連してこの国際交流サロンをどうやって知ったかについて尋ねたところ、知り合いの方から交流する機会を兼ねてということで招待され、参加したと話していた。ここまでのインタビューから、ネットや出回っている情報よりも知り合った人から紹介される方がより外国の人々が積極的に相談所等の施設に足を運ぶのではないかと考えた。

また後日プライベートで彼と会った際に、今後の課題とも言える国際交流イベントの問題・課題について話し合うことができた。まずアイスブレイクで行った連想ゲームについて「どのようなゲームなのかスタッフの説明を聞いても分からなかった」「勝ち負けのあるコンペティションだと思った」というアイスブレイクでより日本人と距離を広げてしまうような内容を冗談交じりで語った上で、進行時や話をする中でスタッフと日本人の人たちだけで盛り上がってしまい疎外感を感じていたことを話してくれた。

自分と彼の考えであるため果たして真実であるか分からないが、日本人に目立つ特徴として「集団に属する傾向」があると話した。そうしたことから話題を振ったり日本語の説明を行ったりする際にスタッフの人が常連の人や同じ日本人とで感覚を共有してある一種盛り上がってしまい、何も分からず説明を菊に聞けない外国の人に阻害感を与えてしまうということが分かった。しかしお互いの認識として日本語が理解できるようになり、文化を理解できればいずれ馴染めるようになるのではという時間の問題のみの解決策しか出すことができなかつた上、彼は次からのイベント参加に消極的という目的に反してしまう結果となっていることから外国人と日本人の交流の難しさを感じさせることとなった。

## 6. 外国人の受容へ向けた日本社会の在り方について

初めは自身の経験をきっかけに「外国人が日本で暮らす中で、その意図にかかわらず日

本人の行動や言動で（大きな人権的問題にならない範囲で）差別的・偏見的な風を受けたことがあるか」が純粹に知りたくなったため始めた調査であったが、結果として留学生や来日したばかりの外国の方と話を交わすだけにとどまらず、相談所といった一般の公共施設調査から宇都宮市国際交流協会の交流会イベント参加と多くの関連する要素を調べるまでに至った。私が学んだことを並べると、まず初めに行った留学生へのインタビューからは、彼らが日本人から差別・偏見的な扱いを受けたことがなく、そのようなことに対して一種の割り切りがあったことが明らかになった。次に相談機関の調査からは国際交流協会の交流イベントを含めて外国人の相談受付の形態を知るとともに留学生などの人々に言語別の対応をしていることを知られていない実態を明らかにすることができた。

外国人の抱える問題というものは今後のグローバル化あるいは具体的に 2020 年の東京オリンピックを機会にさらに多様性を見せ、外国人の人口増加によってその数も増加していくと予想される。こうした可能性に対して今後の日本社会が地域という規模から繋がりを持っていけるよう、更なる調査と話し合いというような日本と外国が繋がる機会というものが重要なのではないだろうか考える。

また今回の調査では詳細を調査できなかったが、予想に反して外国人のための相談所の数が少ないことが分かった。電話による相談というものは場所を決めず国内から、場合によっては世界中から可能なことである。しかし宇都宮大学国際学部にも所属して分かったことの一つとして、人は直接面と向かって話す事のほうが自身の考えを話しやすいということである。国際学部にいる身としてプレゼンテーションやグループディスカッションといった複数人の発表の準備に何度か参加していたが、ほぼ毎回メンバーは必ず情報提供と共有をするため電話や SNS などの文面のみではなく直接集まって話し合っていた。こうした面から、相談の初期段階から直接会って相談ができる場と機会を増やすことも一つの解決策にならないかと考える。

ここ最近になって日本の中でも外国人の文化や習慣に理解し、また関心を示す人が増えてきているように思う。海外で外国の人々と仲良くしている自分としても喜ばしいことではあるが、未だ思い込みと決めつけによる行動が外国人にとって偏見や差別と受け取られてしまうケースを見聞きし気になってしまう。インタビューでは「日本人はこうだから」と寛容な外国人もいるが、これが日本人の考え方や捉えられてしまっはいけない。こうした部分から今後改善を図り、また一人一人がこの現状を知ることによって行動に移せる人も増え、国全体として多種多様な社会を目指していけるのではないだろうか。